

「きよしこの夜」の歴史

1977年にザルツブルグの北にあるオベルンドルフの記念礼拝堂を訪れ
30年後に「手製のクリスマスカード“きよしこの夜”」を完成
なにごとともあきらめず、たえず調べ続ければ答えが見えてくる

2013年11月 藤井 晴雄

1. 音楽学生と一緒にオーベルンドルフの「きよしこの夜」の記念礼拝堂を訪れる

私は1974年から1978年までの4年間、ウィーンのはずれにあるカーレンベルガードルフに住んでいた。1977年の夏、私の家族は日本人補習学校で教鞭をとっていた音楽留学生学生と一緒に、車でスイスの有名なユングフラウの登山口近くにあるインターラーケンへ10日間の旅に出掛けた。1日の車の走行距離は約300km程度が楽であることを聞いていたので、第一日はザルツブルグ経由でオーストリアとスイスの国境近くに宿を予約した。ザルツブルグまで来たとき、音楽学生から「ザルツブルグの近くのオーベルンドルフに、クリスマスで歌う「きよしこの夜の教会」があるから立ち寄りませんか」と言われ、早速、自動車用道路地図を頼りにザルツブルグの北19kmにあるオーベルンドルフに向かって車を走らせ「きよしこの夜の記念礼拝堂」を見つけた。

記念礼拝堂は、こじんまりした六角形の礼拝堂で、内部に作詩者、作曲者と「きよしこの夜」が最初に演奏された聖ニコラウス教会のステンドグラスが壁にはめ込まれていた。敷地内にお土産店があったので、雪景色の記念礼拝堂の絵葉書を2種類と、パンフレットを買い求め、最初の宿泊地である国境近くのホテルへと車を走らせた。その時は、まさかこの訪問が、約30年後に「きよしこの夜」の作詞と作曲の歴史を調べるきっかけになるとは夢にも思わなかった。

2. 「きよしこの夜」に関する資料を収集

時は移り、私の家族は1986年に四国の高松市から東京に移って(社)海外電力調査会で2000年12月末まで15年間勤務し、世界の原子力関係の情報を集めてレポートを書いていた。毎年クリスマス時期には有名な「きよしこの夜」が歌われる。そこで、1990年代前半に、オーベルンドルフの記念礼拝堂で買った「雪景色の記念礼拝堂」をA5サイズの油絵で何枚も描き、数人の友人に差し上げた。

「きよしこの夜」が聖ニコラウス教会で最初に歌われた時、オルガンの風袋がネズミに食い破られていたので、仕方なくギターの演奏で歌われたと云われていることを聞いたので、それを調べてみようかと思っていた。

1990年代後半に、港区の赤阪見付にあるオーストリア大使館所属の観光局に行き、「オーベルンドルフにある“きよしこの夜の記念礼拝堂”の資料はないですか」と訊ねると、「きよしこの夜の記念礼拝堂」のパンフレットと、ザルツブルグに音楽留学していた川瀬紀子さんの現地レポート「“きよしこの夜”のルーツをたどって」を頂いた。このレポートには、川瀬さんがオーベルンドルフで「きよしこの夜」を研究しているトーマス・ホッホラートナー氏に会ったインタビュー記事があった。

2000年頃だったと思うが、インターネットを利用し、検索語で〈Oberndorf〉と〈Silent Night〉の2語で検索したところ、下記 Oberndorf のサイトが出てきた。

<http://www.oberndorf.co.at/museum/stillenacht/stilletnacht.htm>

このホームページを見ると、「きよしこの夜」は、1818年のクリスマス前日に、ヨセフ・モールが作詞し、フランツ・グルーバーが作曲して、12月24日の夜、聖ニコラウス教会で初めて演奏されたことが書いてあり、最初の楽譜とその歌詞が6曲掲載されていた。また当時の聖ニコラウス教会の絵が二つあり、モールとグルーバーの生家の写真もあった。

聖ニコラウス教会は、1890年代に何度も洪水に見舞われて破損し、1913年に老朽化して倒れ、跡地に「きよしこの夜の記念礼拝堂」が建てられた。また15世紀にはオーベルンドルフ近くにあるザルツブルグから岩塩が小舟に載せて運搬された絵がある。

私は直ぐにこれらの情報をパソコンに保存して印刷しておいた。2000年代前半に前記のホームページにアクセスしたが、このホームページは無くなり、商業的なホームページになっていた。貴重な資料は必ずパソコンに保存し、念のため印刷しておくことの重要性を実感した。

3. オーベルンドルフの記念礼拝堂と聖ニコラウス教会の油絵を描く

2000年代前半に「きよしこの夜が最初に歌われた聖ニコラウス教会」と、「きよしこの夜の記念礼拝堂」の油絵で描いたらどうかと思った。聖ニコラウス教会はインターネットからダウンロードした画像を、記念礼拝堂は1976年にオーベルンドルフにある記念礼拝堂のお土産店で買った絵葉書を見ながら2枚の油絵を描いた。額に使う材料は、自転車車で10分の距離にある木工材料店で、透明プラスチックは中央線吉祥寺駅のすぐ近くにあった百貨店で、額に塗るこげ茶色の水性塗料は歩いて3分のペンキ店で買い、手製の額を作ってクリスマス時期に家に飾っている。

私は、オーベルンドルフの記念礼拝堂近くのお土産店で買った雪景色の記念礼拝堂、オーストリア観光局で頂いた資料、大塚野百合さんが創元社から出版した『讃美歌と大作曲家たち』などをもとに、「きよしこの夜の歴史」をまとめ、2000年代前半のクリスマス時期にまとめた。

4. 「きよしこの夜」はどのようにて生まれたのか

「きよしこの夜」は、オーストリアのザルツブルグから19km北側にあるオーベルンドルフ村の聖ニコラウス教会で、1818年12月24日「きよしこの夜」は、ギターで奏で歌われた。

1818年、クリスマス間近のある日、聖ニコラウス教会の副司祭ヨゼフ・モール(26歳)が聖ニコラウス教会のオルガニストで近くにあるアルンスドルフ村の学校の音楽教師でもある親友のフランツ・クサヴィー・グルーバー(31歳)に、クリスマスのミサの間に演奏されるちょっとした曲と一緒に作ろうと提案した。モールが歌詞を何時頃書き終えたのかは不明だが、1818年12月24日朝、モールがグルーバーのところで歌詞を持ってきて、合唱を伴う2音声の曲をギターの伴奏で作曲してくれるように頼んだ。それは、聖ニコラウス教会のオルガンが「調子が良くない状態であった」からだった。

24日の夜、モールがギターを弾いてテノールを受けもち、グルーバーがバスで自らミサの時に演奏した。歌詞は6節で、それぞれ最後のフレーズを合唱で繰り返した。当時の曲には題名も無かった。

注：森企画が出版した「ドイツのクリスマスの歌」によると、この歌(ドイツ語)の原歌は6節ある。

もし、「きよしこの夜」の6節全部がモールの作詞であるとしたら、簡単に書けるはずがないから、この歌は随分前から出来ていたのではないかという推測も出来る。

5. 「きよしこの夜」は戦争終結喜ぶ政治的な歌…誕生秘話紹介

(河北新報、2009年12月20日)

元東北学院大助教授の川端純四郎さん(75)がエッセー集で、賛美歌の謎に迫っている。11月に発刊した第2巻のテーマはクリスマス。この時期、世界中の街に流れる名曲「きよしこの夜」は、約200年前の欧州であった戦争を背景に作詞された政治的な歌だった―と誕生秘話を紹介した。

川端さんの専門は宗教学。エッセー集「さんびかものがたりⅡ」には、32曲の賛美歌を収録。最もポピュラーな「きよしこの夜」には、多くの紙幅を割いた。

この曲は1816年、オーストリアの聖職者が作詞。2年後のクリスマスに、ザルツブルクの北にある小さな村の教会で初めて演奏された。「静かな夜、聖なる夜」で始まる英語などの歌詞は、現在3節。しかし、当時は6節あった。なぜ削除されたのか？

川端さんは2000前のドイツ語の歌詞を訳し、消えた節にある「主は怒りをお捨てになって」「全世界にいたわりを約束された」といった部分に注目した。

19世紀、数百年続いたザルツブルク大司教侯国はナポレオン戦争で崩壊し、フランス、ドイツ、イタリア、オーストリアの各領になり、めまぐるしく支配者が変わった。

モーツァルトが活躍した宮廷都市は飢えと困窮に覆われた。領有権争いが決着したのが、「きよしこの夜」が作詞された1816年だった。

川端さんは「長く続いた戦争が終わり、待ち望んだ平和をたたえた歌だった」と説明する。

都市から都市へ歌い継がれ、19世紀中ごろには、ドイツ・ベルリンの宮廷や一般家庭で愛唱されるようになる。その後、米国に伝わり、世界の隅々へ。「世界で広く歌われるようになるにつれ、政治的、社会的状況にかかわる歌詞が削除された」というのが、川端さんの解釈だ。

川端さんは「この曲は、どんなに酔っぱらったお父さんが歌っても、幼少時代のクリスマスを思い出させる不思議な魅力に満ちている。歌には複雑な歴史があることにも、思いをはせてほしい」と話している。

出典：「さんびかものがたり」この本は2011年春までに全5巻を発刊。第2巻は仙台市内の大型書店などで販売している。2,400円。

6. きよしこの夜の研究者、音楽学生川瀬紀子さんに語る

「きよしこの夜」の起源について一番よく研究しているオーベルンドルフ在住のヨゼフ・ガスナーが、「きよしこの夜」の起源を調べていた。彼が、オーベルンドルフを訪れたザルツブルグで勉強中の日本人音楽生川瀬紀子さんに語ったところによると、「オルガンが壊れたので、あわててギター演奏にかえた説は明らかな間違いで、クリスマス・ミサの時には、ちゃんとミサ曲が演奏されます。ミサ曲は、普通のようにオルガンを伴うオーケストラで演奏された筈です。短いクリスマスソングだけが歌われたことはおかしい。「きよしこの夜」はミサ曲の間に歌われた小曲に過ぎなかったのです。確かにオルガンの調子は良くない状態にありましたが、そのことは、必ずしもオルガンが壊れていて演奏が不可能だったということはないのです。また、当時ギター伴奏で讃美歌などを歌うことが流行していました。」

この歌が世に知られるようになったのは、この名曲が生まれた翌年の1819年に聖ニコラウス教会を訪れたオルガン修理人カール・マウラッヒャー(チロルのツイラーターの住人)が、この歌に感動し、その楽譜を貰い受けた。それは、作者不明のチロル民謡として愛唱された。

1831年にドイツのライプツヒで開かれたクリスマスのお祭りの時に、一つの出来事が起こった。

シュトラッサー兄弟姉妹のカルテットがこの祭りに招かれて歌った中の一曲にこの歌が含まれていた。それをたまたま聞いたアントン・フリーズというドレスデン(ドイツ)の音楽出版社が「これはすばらしい！」と感動し、それを聞き覚えたとおりに書き写して出版した。勿論、チロル民謡として書かれていたので、この歌は長い間、作詞者、作曲者不明のまま全世界に広がって、多くの人に愛される歌となった。

驚いたのは作曲したグルーパー本人で、自分がその曲を書いたことを明らかにし、原曲との違いを指摘した。彼は、後でいろいろな伴奏形式による編曲を行っている。

7. 作詞者と作曲者ヨゼフ・モール(作詞)

1792年12月11日、ザルツブルグで歩兵と、編み物をして生活を営んでいた女性との私生児として生まれた。彼は利発ですばらしいテナーで歌うことができ、大聖堂合唱隊の責任者ヨーハン・ヒルンレに会いだされて彼の養子になり、そのおかげでザルツブルグの神学校で2年学んだ後、1815年に聖職者の資格をとり、1817年にオーベルンドルフにある聖ニコラウス教会の副司祭として赴任し、村人から大変慕われたが、司祭ネストーラに嫌われ、オーベルンドルフの教会をわずか2年で去った。その後、ザルツブルグの近郊の教会を転々とし、1848年にヴァグライン・イン・ボンガウで亡くなった。

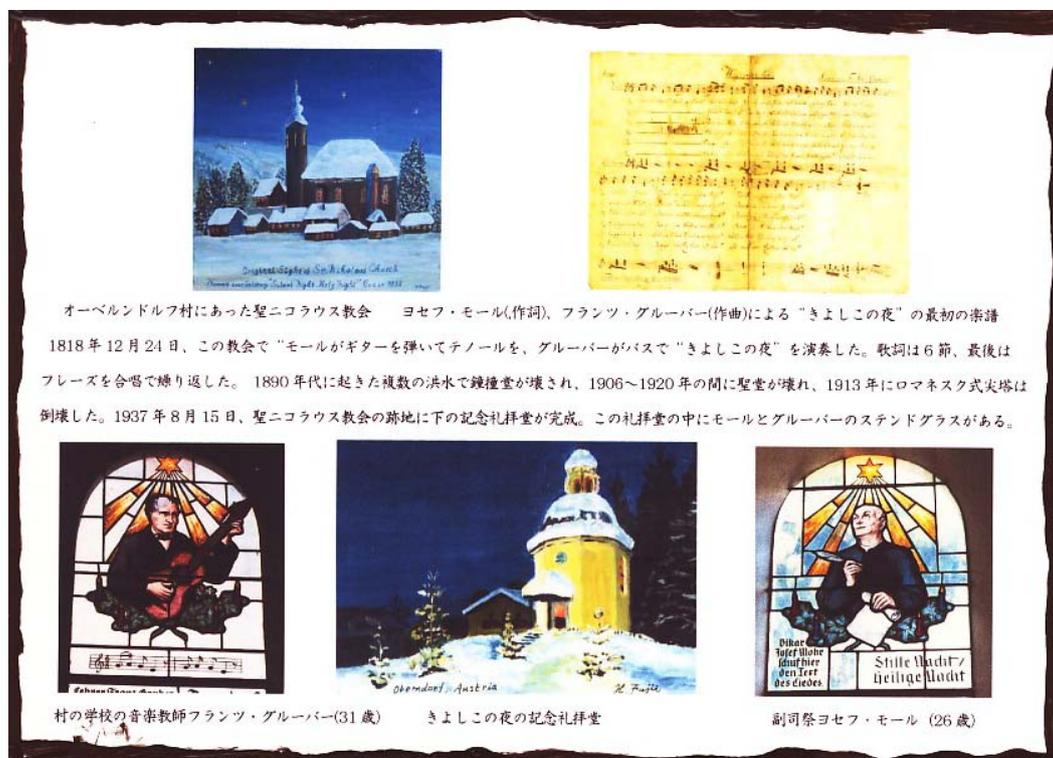
フランツ・クサヴィー・グルーバー(作曲)

1797年、織物師の3男としてオーバーエーステライヒ州のホップブルグで生まれ、音楽の才能を活かしてアルンスドルフの小学校で22年の音楽教師生活を送った。1826年からオーベルンドルフの教会(聖ニコラウス教会)でオルガン弾いていた。1829年にベルンフトルフ村で教え、1833年から亡くなる1863年までハラインの教会でオルガニストと職についていた。

モールとグルーバーは、1817年にオーベルンドルフで出逢い、その友情は厚いものであった。

8. クリスマス用カードの作製

前記の資料をもとに、2008年12月にパソコンを利用して、きよしこの夜がどのようにして出来たかを簡単に説明したクリスマスカードを作りました。このクリスマスカードは、藤井は作成したもので、販売はしていません。下のこげ茶色の部分は、切り取ってコピーコマンドで、新しいWord(doc)に貼り付け、拡大でも縮小でもできます。ご自由に印刷し、クリスマス・カードとしてお使い下さい。二つの教会の油絵は私が描きました。



注:上の写真の上部の聖ニコラウス教会の絵は、インターネットに掲載されていた画像を藤井が A1 サイズの油絵で画いたものを、カメラで撮影して JPG で保存し、ワード文書に貼り付けた。

下部のオーベルンドルフ記念礼拝堂の絵は、1977年夏にオーベルンドルフ記念礼拝堂を訪れた時に

記念礼拝堂の敷地にあった売店で買った絵葉書を、藤井が油絵で A5 サイズで描き、スキャンして JPG で保存し、ワード文書に貼り付けた。

参考資料:オーストリア大使館観光局で入手した「きよしこの夜」の研究者、音楽学生川瀬紀子さんに語る」の資料

及び「この聖き夜に、川端純四郎著、日本キリスト教団出版局、2009年10月25日発行」を基に改訂(2012年12月12日修正)